

【第二回花の会 演目詞章】

茶音頭

世の中に すぐれて花は 吉野山

紅葉は龍田 茶は宇治の 都の辰巳 それよりも

廓は都の 未申 数寄とは誰が 名に立てし

濃茶の色の 深緑 松の位に くらべては

困といふも 低けれど 情は同じ 床飾り

飾らぬ胸の 裏表 帛紗さばけぬ 心から

聞けば思惑 違い棚 逢ふてどうして 香箱の

柄杓の竹は 直ぐなれど そちは茶杓の 曲み文字

憂さを晴らしの初昔 昔噺の爺婆となるまで

釜の中冷めず 縁なくさりの 末長く 千代万代へ

蘆屋道満大内鑑

葛の葉子別れの段

ついたる折からに

立ち帰る安倍の保名、それと見るより

「ヤア庄司殿御夫婦か」「お身は保名か、なう懐かしやく」「イヤそ

れは此方も御同然。まづ奥へ、いざ御案内」と、立つ袂をひかへ

「まづ／＼急に渡す者あり、コレ預りの葛の葉連れて参つた。渡し申す婿殿」

と引き合はされて葛の葉は、さすが二人の親の前、云はで心を知れかしの、顔に会釈ぞこぼれける

保名大きに痛み入り

「これは／＼拙者が留守の内はや葛の葉に御対面なされ、衣服を着せ替へ今連れて来たやうに見せ、この保名を困らせてお笑ひなされうためか。女房も女房、今初めて来たやうに、所体をつくつて何ぢやの、アハ、／＼この申し訳こそ段々、御息女葛の葉と夫婦になりこれにあること、先年信田の宮にて悪右衛門狼藉の時、すでに事難儀におよび生害仕らうと存ずる処へ、早速この人が駆け付けさま／＼の介抱。それより一緒に立ち退き所々漂泊し、この所の住居はや五年。安倍の童子と申す五歳の男子をまうけ、おとなしく生ひ立ち申すにつけ、これを力にお詫び申さば、孫に免じわが不行跡御免もあらうか、今日は参らう明日はお詫びに参らんと、口では申せども何か所存に任せず、一日々々と相延び今更お詫び申さう詞もない。重々の不調法、孫に免じ御勘忍あるやうに、母様お取りなしなされ下され」と、身を投げ伏して詫びにける

「イヤサ云ひ訳どころでない。来て見れば不思議たら／＼。まづあの機織る人を密かに覗いて見ておぢやれ」「げにも／＼女房はこゝにゐる、誰が機を織るらん」

と呟きながら立ち寄つて、そつと覗いてびつくりし、色を違へ立ち帰

り

「あそこにも葛の葉こゝにも葛の葉。コリヤどうぢや、こはくいか
に」

と顛倒し、奥を見ては呆れ顔、こなたを見ては興覚め顔、物をも云はず立つつゝ思ひがけなき驚きにたゞ茫然たるばかりなり

「オ、当惑の体至極せり。われも信田にて別れし後、悪右衛門が讒言にて、重代の所領没収せられ、吉見の山の片里に世を忍び住むそのうち、貴殿のことを恋慕ひ焦がれ煩ふこの娘、五年の歳月いろく看病肝を焦がす処、不慮にこの頃貴殿の在処聞くと等しく、忽ち病氣平癒し、夫婦が召し連れ来て見れば思ひも寄らぬ二人の葛の葉、今日も明日も覚め果てしが、退いて分別するに離魂病といふ病あり。俗には影の煩ひと言ひ形を二つに分くると言へども、それも一つ軒をば離れず、時々形を合はすと言へばそれでもなし。正しくこれは変化の所為か、又は天狗の業なるべし。わが娘に引き合はせ、誠をもって理を押しさば、忽ち姿を現すべし、性根を忘ずる処でなし。保名心をつけられよ」

「気をつけ給へ婿殿」

と、夫婦力をつけ給へば
「仰せまでも候はず、我も加茂の保憲に随ひこれしきの邪正を糺すこと一句一指の手段にあり。きつと証を見せ申さん。各々は暫しの内、見苦しくともこの物置に密かにお忍び下さるべし」

と、余儀なき詞に人々と
「構へて仕損じ給ふな」

と、危ぶ心の物置の簾を上げて忍ばるゝ

保名異なき風情にて内に入り

「これはく坊主めがあがき草臥れ、この踏反つて寝た姿わいの。童子が母はをはせぬか今帰りし」

と、呼ばれば

前垂襷取りあへず

「いつより今日のお帰りはおそかりし。お肌寒にはなかりしか」

「イヤく空も暖かに住吉へ参詣し、帰りは例の天王寺、なう思ひも寄らず六時堂の前、お身の父庄司殿御夫婦にはたと行き逢ひ、日頃の不届き胸につまつて挨拶をしかねたれば、あちには一向恨みの気もなく、在処を聞いたゆる娘に逢はうため、尋ね来たれども、見る通り連れ衆もあり、この衆を片付け日暮れにはこれへ参らう。食べ物の用意は無用、洗足の湯を頼む、とモなかく心解けたる挨拶、一つ二つ物云はうと思ひしが、かいつまんでも五年の話、思はず時を移いた。お身も久々の対面さぞ悦び。身も大慶」

と、物語れば

「それは何よりお嬉しや、日暮れとて間もなし。用意無用と宣ふとも、何ぞせざるまいか」「イヤく孫をつき出しお目にかけるが馳走の一番。お身も髪に櫛でも入れ衣服も着かへ、しをたらとした体を見せませぬ、それが馳走の第二番、サ早うく身は夜と共の物語。この草臥れでは続くまい。日暮れまで一睡せん」

と、云ひつゝ女房の形風情見れども驚く体もなく、髪取り上ぐるその姿

「どつこに一つの云ひ分なし。たゞしは娘を連れて来た庄司夫婦が何ぞではあるまいか」

と、迷ふ心の奥の間に、忍びて事を窺ひける

妻は衣服を改めてしをくくと奥より出で、臥したる童子を抱き上げ、乳房を含め抱き締めて云はんとすれどせぐり来る、涙は声に先立ちて暫く咽び入りけるが

「恥づかしや浅ましや年月包みし甲斐もなく、おのれと本性露して妻子の縁をこれ切りに、別れねばならぬ品になる。父御にかくと云ひたい、が互ひに顔を合はせては、身の上語るも面伏せ。御身寝耳によく覚え、父御にかくと伝へてたべ。我は誠は人間ならず、六年以前信田にて悪右衛門に狩り出され、死ぬる命を保名殿に助けられ、再び花咲く蘭菊の千年近き狐ぞや、剩へ我故に数ヶ所の疵を受け給ひ、生害せんとし給ひし命の恩を報ぜん、葛の葉姫の姿と変じ、疵を介抱自害をとどめ勞り付き添ふその内に、結ぶ妹背の愛着心夫婦の語らひなせしより、夫の大事さ大切さ愚痴なる畜生三界は、人間よりは百倍ぞや。殊におこをまうけしより右と、左に夫と子と抱いて寝る夜の睦言も夕べの床を限りぞと、知らず野干の通力もいとし可愛に失せけるか。今別るゝとて父御前の業でもなく、元より名を借り姿を借りし葛の葉殿、恩はあれども怨はなし。庄司殿御夫婦を誠の祖父様祖母様、葛の葉殿を真実の母と申うて親しまばさのみ憎うも覚すまじ。悪あがきをふつつと止め、手習ひ学問精出して、さすがは父の子程あり、器用者と誉められよ。何をさせても埒あかぬ道理よ狐の子ぢやものと、人に笑はれ誹られて、母が名迄も呼び出すな。常々父御前の、虫けらの命を取る碌な者にはなるまいと、たゞ仮初めのお叱りも、母が狐の本性を受け継いだるか浅ましやと、胸に釘針刺す如く何ぼう悲しかりつるに、成人の後までも小鳥一つ虫一つ、無益の殺生ばしすなえ、必ず必ず別るゝとも母はそなたの影身に添ひ、行く末長く守るべし、とは云

ふものゝ振り捨てゝこれが何と帰られう、名残をしや、いとほしや、離れがたなや、こち寄れ」

と、抱き上げ、抱き付き抱き締めて、思はず『クワイ』と泣く声に保名一間を走り出で

「仔細は聞いたり何故に童子を捨てゝやるべき」

と呼ばはる声に

庄司夫婦、葛の葉も転び出で

「放ちは遣らじ」

と、取付けば

抱きし童子をはたと捨て形は消えて失せにける

庄司目をしばたゝき

「エ、さて夢ばかりかくと知つたらば、ふかく尋ね来ずとも仕やうもやうあるべきに、無惨の次第を見ることや」

と、夫婦が悔めば

葛の葉も手持ち無沙汰に見えけるが

「ア、さうぢや、何はともあれかくもあれ、自らが姿となり自が名を名乗り、産んで貰ひしこの坊はとりもなほさぬわが子なり。父様母様お前方のためにも、真実の孫ぢやと思ふて下さんせ。コレ坊んち今からこの母が身に替へていとしが。今迄の母様のやうに母様々々となつこしう頼むぞや。オ、よい子や」

と、抱き給へば

乳を探して

「イヤくこの母様はそでない」

と、膝を這ひ下り見廻して

「母様々々」

と、呼び叫べば

保名堪へかね大声上げ

「たとへ野干の身なりとも物の哀れを知ればこそ五年六年付き纏ひ、命の恩を報ぜずや、況んや子迄まうけし仲。狐を妻に持つたりと笑ふ人は笑ひもせよ我はちつとも恥づかしからず。別るゝと相對にて互ひに合点の上は失せもせよ消へもせよ、このまゝにてはいつ迄も、放ちはやらじやア葛の葉。童子が母よ女房よ」

と、間の襖を引き明くれば、向かふの障子に一首の歌『恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉』

「ハアさては一首のかたみを残し、つれなうも帰りしな、われに名残りは残らずとも、童子は不便に思はずか」

と、奥に駆け入り表に出で狂気の如く駆けめぐれば
童子も父の跡につき

「母様どこへ行かしやつた。母様なう」

と、かつぱと伏し、声をはかりに足摺りし身を悶え歎くにぞ
庄司夫婦、葛の葉も、共に哀れに取り乱し前後不覚に歎かるゝ、

葛の葉は勇みなく

「何を云ふても私に、乳がなうてはいつ迄もこの子が馴染まうやうがない。あつちにあつても入らぬ乳貰ふてほしい」

と、泣きければ

「オ、道理々々それまでもなく一度は尋ね逢ははかなはぬ義理。夜道をゆくもたどくし、明けなば夫婦童子を連れ」

尋ねて来ませ和泉なる信田の森へと

葛の葉道行

こゝに哀れをとゞめしは、安倍の童子が母上なり。元よりその身は畜生の、我が故郷へ帰ろやれ

我が住み慣れし一叢の、仮の宿りは秋霧に、この身知るかと恥づかしく、足爪立てゝちよこくくくと、所体乱るゝ萩芒。ハツと思ふて取形を、つくりつくろう笠の内。傾く日かげまばゆくて、忍ぶ身のさわりはここの人里、かしこの往き来。それにいやなは犬の声、ぞつとして、ぞつとそげ立つ露しぐれ。降りみ降らずみ照り降りに、我は古巢へ帰る身を、嫁入りくくと里の子の、あのいたいけを見るにつけ、跡にまします父母に、預け置いたる幼な子の、乳房尋ねてさこそ嘆かんと不憫やと、涙に道も見え分かず。水に写して我が姿、甲斐性ありげに行く野路を、結ぶ妹背の愛着心、女夫の語らひなそうより、右と左に夫と子と暮らす嬉しさ楽しさも、今日を限りと知らざりしは野干の通力失せけるか。必ずく別るゝとも、母はそなたのかげみに添い、行末長う守るぞや。今は悔やまじ嘆かじと、云えど乱るゝ乱菊の、飛ぶが如くに